

## リレー随想

家内との結婚を決意したはいものの、それまでのいい加減な生活がたたって、私の貯金通帳には、情けない数字が並んでいた。

若いときに金がないのは当たり前かと思っていて、それはそうなのだけど、四十を過ぎた今でも、あまり小金をためられないでいるところを見ると、私の経済感覚にも少し問題があったのだと、このころようやく思えるようになった。

当時、金をためようなどという考えは、とんと持ち合わせていなかった。

「(結婚)式を挙げる、お金はないなあ」と私。

「お金が無くて、式は挙げられるよ」と家内が、会費制でやれば、そんなにお金を掛けず出来ると言った。会費制も何も、結婚式そのものが私にはよく分からなかったもので、何でもいいやと思って、家内にすべてを任せた。

「はい、はい、はいで出来るものなの?」。家内に聞いてみ

## お金の、ない

土地家屋調査士

田口 一法さん



た。

「それはやり方次第で、どうにでもなるよ」と家内は言い、会費制は「招待される方も、そんなに包まなくていいから助かる」のだそうだ。

「会費もなるだけ安く、大人を三千円にし、子どもを五

百円にしよう」と家内が言った。何を根拠に数字を出したのか分からないが、負担にならない金額で人を招待できるなら、貧乏育ちとしては、なによりである。

それは家内も同様で、「この金額でなら、大勢人を呼べる」と家内の方は、名簿を作ったら二百人を超えた(家内の方で実際に来てくれたのは、二百五十人)。私にも「いっぱい呼んでいいよ」と言ったが、私の方はせいせい二、三十人がいいところで、大勢を呼ぶという考えが私には、あまり理解できなかった。

出だしがこんなであったので、風変わりというか、ちょっと面白い結婚式になったと思うが、そこの辺の「報告も、いずれ出来るだろう。だがその前に、家内の父親へあいさつを済ませておかなければならない。

「お金がありませんので、結婚は出来ません。娘さんと、結婚させてください」

父親は黙ってうなずいてくれたが、内心は「変な男と一緒にあったなあ」と思ったに違いない。

(熊本市花園、46歳)